

# F・ベィコンにおける富と徳：『ニュー・アトランティス』に関する一試論

著者	佐々木 健
雑誌名	星薬科大学一般教育論集
号	7
ページ	19-55
発行年	1989
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1240/00000169/">http://id.nii.ac.jp/1240/00000169/</a>

# F・ベイヤコンにおける富と徳

——『ニュー・アトランティス』に関する一試論——

佐々木 健

## はじめに

本稿はベイヤコン (Francis Bacon, 1561-1626) の遺著『ニュー・アトランティス』(New Atlantis, 1627) を素材として取り上げ、この作品の分析を通じて、そこでのベイヤコンの真意を解明し、あわせて、ありしベイヤコンの思想の一断面を剔抉しようとするひとつの試みである。<sup>1</sup>

ところで、『ニュー・アトランティス』を「産業科学」<sup>2</sup>の夢を描く物語として捉える視点がある。この視点はこの物語の主題を「科学」に限定する点で一面的である。ベイヤコンの思想を「科学」思想に局限し、彼における「科学」概念および「科学」方法論を——肯定的に評価するにせよ、否定的に批評するにせよ——ベイヤコン以後の「科学」の理論的成果の地点から批判することは、問題の立て方として肯綮を逸している。ベイヤコンと「科学」、あるいはベイヤコンと「科学技術」という問題の立て方は、ベイヤコンその人を近代「科学」の先駆者の一人の地位に祭りあげ、彼の思想の一面をその全体にすりかえる、少なくとも「科学」思想の側面をベイヤコンの思想全体のなかで最も優れた、あるいは最も「進歩的」な部

分として捉える、いわば「イドラ」を前提している。近代「科学」、近代「科学技術」の先駆者であるというベィコン像は一八世紀が、とくにフランスのアンシクロペディストたちが描いた姿ではないのか、そして今日にいたるまでの古典的なベィコン像はそれに規定され制約されているのではないか。本稿はそうした既成の観念を極力排して、ベィコンのこの作品に表出された思想をそのありし実相において解明しようと試みるものである。

さて、ベィコンの当初の構想では、『ニュー・アトランティス』は大きく分けて二つの部分から成るはずであった、という。ベィコンの没後、観察・実験の記録『森の森』(Sylva Sylvarum)とあわせて『ニュー・アトランティス』を刊行した邸内牧師ローリィ (William Rawley) は、「サロモンの家」(Salomon's House)の記述で終わる部分(叙述の便宜のため仮に第一部と呼ぶ)のあとに、「法機構」(a frame of Laws)あるいは「コモンウェルスの最善の状態ないし範型」(the best state or mould of a commonwealth)を取り扱う部分(同様に、第二部と呼ぶ)がくる予定であった、と記している。「第二部」が書かれなかったことについて、ローリィは、ベィコンはこの部分を完成するには長い期間を要すると見込んで、「自然誌」(the Natural History) (＝観察・実験の記録)の蒐集に先ず精力を注いだのである、と述べている。(p. 127)

しかしこれは当事者ベィコン自身の言葉ではない。ローリィの言葉は額面通りにこれを受取ることができるであろうか。チャーベリーのハーバート (Herbert of Cherbury, 1583-1648) とホッブス (Thomas Hobbes, 1588-1679) の協力を得てなった『学問の進歩』のラテン語増補版、『学問の尊厳と進歩』(De Dignitate et Augmentis Scientiarum, 1623)のなかで、ベィコンは「もし自分が今後、閑暇を得て政治的知識に関するものを産み出すとすれば、その著作は流産する (abortive) か死後刊行される (posthumous) かのいずれかであろう」と述べている。『ニュー・アトランティス』の執筆時期は一六二二年から二四年にかけてであったとみられるから、この言葉は執筆以前もしくは執筆途上で発せ

られた、といって大過ない。それでは、「第一部」は死後刊行され、「第二部」は流産に終わった、ということになるのであらうか。果たして、『ニュー・アトランティス』は刊行された「第一部」と起筆されなかった「第二部」とから成るはずであった未完の遺著なのであろうか。ことによると、それは未完を装った、完成された作品であるのではないであらうか。この作品が生前に刊行されなかった理由は、それが同時に「政治的知識に関する」完成された作品であることにあったのでないであらうか。少なくとも、そうであるかのように、この作品をみ、「統制的」(regulativ)、「発見的」(heuristisch)にこれを考察すれば、この作品は何を物語るものとして理解することができるであらうか。

# 1 ギリシャ文化とキリスト教信仰——「ベンサレム」の文化的位相——

ベイコンが描く「南洋」(the South Sea)の孤島「ニュー・アトランティス」島は、現在のソロモン諸島にあたる領域に設定されていると考えられる。このように推測することは困難ではない。

ソロモン諸島。フランスの航海者ブーガンヴィル (Louis Antoine de Bougainville, 1729-1811) が彼の指揮したフランス最初の世界周航——その記録『航海記』(Description d'un voyage autour du monde, 1771-72) はディドロ (Denis Diderot, 1713-84) に強い感銘を与え、汚れなき「自然」により既成の「人為」の腐敗をあばく、タヒチ島を舞台とした創作、『ブーガンヴィル航海記補遺』(Supplément au voyage de Bougainville, 一七七二—七三年執筆、九六年刊行)の筆をディドロにとらせる機縁となった——の際に発見したブーゲンヴィル島、そしてかのガダルカナル島、これらの島をふくむソロモン諸島。ニュー・ギニアの東方に浮かぶニュー・ブリテン島(かのラバウルの町はその北東の先端に位置する)のさらに東方に浮かぶソロモン諸島。この諸島をスペインの航海者メンダーニャがヨーロッパ人として

はじめて発見したのが一五六八年、ベィコンが七才になる年のことである。その発見は「三大発明」、ヨーロッパ人の生活に大きな変化をもたらした世界の様相を一変させたベィコンが評した三大発明の一つである磁針コンパスが可能にした、「大航海」の所業の一つである。そしてこれらの島々に冠せられたソロモンという名はベィコンが理想的な人間像として敬愛してやまなかった古代ヘブライの王ソロモンその人の名にほかならない。ソロモンにちなんで命名された研究施設に仮託して自然探究のための共同研究機関の構想が描かれる物語の場面が、ソロモン諸島に設定されたとしても不思議ではない。

さて、物語は、総勢五一名をのせた「わたしたち」の船がペルーから、「南洋」を通り中国および日本に向け出帆したところから始まり、スペイン語を解する「わたしたち」が「ベンサレム」(Bensalem)王国に漂着し上陸と滞在を許可されるまでの経緯を導入部とし、サロモンの家の長老が上記の研究機関についてスペイン語で語る部分を結末としている。導入部のあと、物語は、「実に、もしこの世に人間の眼をひきつけておくに値する鏡があるとすれば、この国こそそれである」(p.147)と「わたしたち」を感嘆させるこの「幸多き島」——国土の大部分が「まれにみる肥沃な土地」で自給自足の態勢を維持することのできる周囲五六〇〇マイルのこのニュー・アトランティス、しかも「敬虔の念に満ち仁慈あふれるキリスト教国民」の住まうこのベンサレムの国——での「わたしたち」の見聞・体験を記す形で進展する。導入部以下の物語の構成は次の通りである。一、ニュー・アトランティスⅡベンサレムのこと、1 ベンサレムの歴史、2 「大アトランティス」(the great Atlantis) のこと、および3 「ソラモナ王」(King Solamona) の業績。二、ベンサレムの社会制度のこと、1 家族制度、および2 婚姻制度。三、サロモンの家のこと、1 設立目的、2 施設・装置、3 研究員の構成と作業の分担、および4 儀式・典礼。

以下、本章では、一の部分に照準を合せて、ベンサレムの精神的基軸は何か、ベンサレムがいかなる文化的位相に置か

れているかを確定し、そのことをつうじて、この作品に表出されたかぎりでの「古代人」(Ancients)に対する「現代人」(Moderns=近代人)の自己意識ないし自己主張のあり様をみる。<sup>10</sup> 先ず、ニュー・アトランティスに関する略年表を掲げる。

◇一六〇〇年、ニュー・アトランティスの現在。ペンサレムはベイコンが生きるこの時代、今、現存する、という状況設定である。 ◇一四八〇年頃、ヨーロッパ人の航海、盛んになる。 ◇五〇年頃(「救世主の昇天の約二〇年後」)、「箱船」の出来事と神の啓示、ペンサレムはキリスト教に改宗。 ◇紀元前三〇〇年頃、国王ソラモナ、サロモンの家を設立。外国人の入国を禁じ、ペンサレム人の海外渡航を制限。 ◇紀元前一三〇〇年頃、大アトランティスが「洪水」のため消滅。 ◇紀元前一四〇〇年頃、遠洋航海が盛んに行なわれる。国王は「アルタビン」(Altabin)。大アトランティス、大遠征を実施。(◇紀元前三三〇〇年頃、ノアの洪水。)

この年表をふまえながら整理すると、次の事情が明らかになる。①ペンサレム人はノアの大洪水——ベイコンはこれを「全般的な洪水」(the universal flood)と呼ぶ——の際に死滅を免がれた人類の一部とともに古く、古代ギリシャよりも古い起源を有すること、②ペンサレムは大アトランティスの侵入を撃退し、ギリシャではソクラテス(Socrates, 470-399 B. C.)、プラトン(Platon, 427-347 B. C.)、アリストテレス(Aristoteles, 384-322 B. C.)が輩出しおえた後に、ソロモン王の対応物ともいうべきソラモナ王がこの国を統治し、自然探究のための共同研究機関を設立するとともに、法機構を確立したこと、③ペンサレムは神の啓示を受入れキリスト教に改宗して「不信仰」(infidelity)から救われ、現在に至っていること、である。ギリシャより古く、ヘブライ的精神にみあう伝統によってギリシャ思想の感染を免がれ、キリスト教を精神的基軸とする、——これがペンサレムの文化的特質である。このような文化的位相においてペンサレムは照準されている。家族制度が論じられる箇所て叙述される「一族の宴」(the Feast of the Family)の席で歌われる讚美歌

は、そのような事態を表現している。「讚美歌の主題は必ずアダムとノアとアブラハムへの讚美である。このうち前の二者はこの世界に人間を住ませ、最後の者は信仰厚き者の父 (the Father of the Faithful) である。讚美歌はつねに締め括りとして救世主の生誕に感謝を捧げる。救世主の生誕においてこそ、すべての者の誕生が祝福されるからである。」(p. 156)

以上のような年代誌的な順序において構成されたベンサレムの文化的位相は同時にまた、古代ギリシャの思想の代表的な担い手の一人であったプラトンに代表される「古代人」に対する「現代人」(＝近代人)の対抗意識を表出するものである。この事情を明らかにするために、先ずその前段として、第一に、ベンサレムがキリスト教に改宗した状況、第二に、大アトランティスが消滅した原因、をみておく。

第一の論点、キリスト教への改宗の状況は先の略年表における「箱船」の出来事に関わる。

ある晩、島の東の沖に、頂上に光の十字架のついた巨大な光の円柱が現れた。たまたまサロモンの家の一「賢者」が小舟の一隻に乗り合わせていた。この光景を見守っていた彼は額ずき、跪き、両手を天に向けて祈る。(この祈りの内容と意味については次章で考察する。) 祈りとともに、彼の乗った舟だけが動けるようになる。舟が近づくや、光の十字架と円柱は碎け、散乱し、すぐ消えてしまう。そこへ小さな杉の箱舟 (Ark) が波間をぬって流れてくる。そのなかには、一冊の書籍 (新旧約聖書、黙示録、その他の經典が収められている) と一通の書簡が入っている。書簡には次のように記してある。「いや高きものの下僕にしてイエス・キリストの使徒である私バルトロマイは、栄光の幻となって私の前に現れた天使より、汝はこの箱舟を海の波間に委ねるべし、と告げられた。それゆえ私は、この箱舟が漂着するように神が定められたところの国民に対して、その漂着と同じ日に、父なる神、そして主イエスより救済と平和と善意とが汝らのもとへ到っている、と証言し宣言する。」(p. 138) ベンサレムが聖バルトロマイの使徒にふさわしい「福音」の力をつうじて、神の

恩寵に照らされて信仰の世界に入り、キリスト教に改宗する状況はこのようなものである。(箱舟のもつ意味は第三章でみる。)

今ここで重要な点は、この箱舟の出来事が「箱舟によって(旧世界のなかで今日まで残る一部が洪水から救われたように)この国は不信仰から救われた」(p. 139)、という形で意味付けられていることである。ここでは、大洪水の際にノアの箱舟によって救われた人類の一部とともに古く、しかも箱舟の出来事によってキリスト教信仰に入った小さな島国ベンサレムとの対比において、「全般的な洪水」ではない「局所的な洪水」(a particular deluge or inundation)によって消滅した不義の<sup>11</sup>大国が予想されている。

この地点でベイコンはプラトンを念頭に置き、明らかに後者の晩年の著作『ティマイオス』(Timaios)と『クリティアス』(Kritias)<sup>11</sup>を読者に想起させる形で叙述を展開する。彼はプラントが描くアナティのあり方とアトランティスの状況を祖上にのせ両者に対する両面批判を展開する。ここに、「あなたがたヨーロッパの偉大な人物」プラトン(「古代人」)に対するベイコン(「現代人」)の自己意識ないし自己主張が表出されている。

これが第二の論点、大アトランティスの滅亡の原因に関わる点である。アトランティスとは、大西洋上にあると太古より想像されていた神話上の巨大な島ないし大陸である。プラトンは『ティマイオス』のなかで、「ヘラクレスの柱」(「ジブラルタル海峡」)の彼方、大西洋上に浮かび、突然の大地震と大洪水によって一夜のうちに消滅したものとして、アトランティスに言及している。また『クリティアス』の後半では、アトランティスの由来、神殿・社、都市計画、統治形態、等の模様が叙述されている。ベイコンは、プラトンが描くアトランティスの模様を「詩的想像力の所産で寓意的、空想的」(poetic and fabulous)なものとして一蹴しながらも、アトランティスそのものの実在を認め、これを今日のアメリカ大陸の一部、具体的にはペルーおよびメキシコと同定している。「武力、海運、財宝の点で壮大で強力な」アトランティ



ス、当時「コヤ」(Coya)と呼ばれていたペルーと「ティランベル」(Tyrambel)と呼ばれていたメキシコはそれぞれ大遠征を企て、前者はニュー・アトランティスを襲い、後者は地中海にまで攻め入った。ところが大アトランティスは遠征から「百年も経たないうちに」滅亡した。それは「あなたがたヨーロッパの例の人物が言うように大地震によってではなく、局部的な洪水によってであった」<sup>13</sup>。大アトランティスの滅亡の原因となった大洪水は、その尊大な企てに対する「神の復讐」(the Divine Revenge)の現れであった、というのである。(p. 141-2)

この地点で、アテナイはアトランティスの大攻勢を破ったではないか、また「洪水」についていえば、アテナイは「ギリシャのノア」とも称すべきデウカリオンによって破滅から救われたではないか、という疑問が寄せられるであろう。このことを予想して、ベィコンは、地中海にまで攻め入ったティランベルに対するアテナイの対処の仕方と、ニュー・アトランティスを襲ったコヤに対するペンサレムの処遇の仕方とを対比する。前者、すなわち、プラトンでは、ソロンがエジプトの神官から聞いたものとして描かれる事態について、ベィコンは次のように書いている。「確かにそのようなことはあった。しかし、侵入勢力に抵抗しこれを撃退する名誉 (the glory of the repulse and resistance) を担ったのは古代のアテナイ人であったかどうか、それについては何も言えない。だが、この遠征から一隻の船も一人の兵も帰って来なかったことは確かな事実である。」(p. 143) ここに、遠征軍はアテナイ人により一人残らず殺害された、ということが暗示されている。これに対し後者の場合、国王アルダビンの巧みな作戦・戦略により侵入勢力は降伏を余儀なくされ、なおかつ、国王の計らいにより全員が放免される。(ibid.) 実現された「正義」の担い手であるはずのアテナイの残酷性と、「敵」をも赦すペンサレムの慈悲とが対比され、後者の前者に対する価値的な優越性が浮彫されているのである。『ニュー・アトランティス』の「新」に込められた「現代人」の自己意識ないし自己主張はこのような価値的な優越性の自覚ないし強調を内実とするものである。

ところでプラトンは、未完の『クリティアス』の末尾の部分でこう書いている。神の本性が人々のうちに働く間は、彼らは法に従い「神的な同族」（「ポセイダンの子孫」）に対して好意的であり、「徳以外のすべてを軽蔑し」、「ぜいたくに酔い富のために自分を統制することができなくなって破滅すること」がなかった。彼らは、外面的な物質的富への「熱心さと尊敬」によって「これらのものの自体が萎縮するばかりではなく、かの徳もまたこれらのものとともに亡びるということ」を看取していたのである。しかし、人々のうちにあるこの「神的な割り当て」が人間的なものと混合して「人間的な法習」が優勢になるに及んで、人々はこれまでもっていた「美しいもの」を保つことができなくなり、醜く振舞うようになった。こうした墮落を見てとったゼウスは「立派な族が惨めな状態にあるのを知って、かれらが自制することを学んでよりよく調和するものになるように、かれらに罰を与えようと思い、すべての神々を自分たちの最も貴重な住まいに集めた……。」ここから、アトランティスの倫理と国政のあり方に関する議論が展開されることになっていたはずであり、そうすれば、アトランティスの「理想性」は一層明確に規定されたことであろう、と推測される。<sup>17</sup>『クリティアス』が未完で終わるところから、ペイコンの『ニュー・アトランティス』は始まる。ここに、ニュー・アトランティスがまさに、ニュー・アトランティスとして設定される最大の理由がある。アトランティスにとってかわるニュー・アトランティスを構想するなかで、ペイコンは、富（物質的富）への耽溺による人間の墮落を抑止する徳（道徳的・倫理的徳）、もしくは富にみあいこれを支える徳と、徳を成立せしめる精神的基盤は何か、という問題をプラトンから引き受けた、少なくとも、この問題をプラトンと共有しうる地点に立っていたのである。この問題に対する回答は『ニュー・アトランティス』において、ベンサレムの精神的基軸についていえば、キリスト教のギリシャ思想に対する価値的優越性を弁証する方向で書かれなければならないはずである。ペイコン自身の思想の内部脈絡に即していえば、人間が墮罪の結果、「神の復讐」によって喪失した「被造物に対する支配」と「無垢」とを回復する、という聖書的表象において捉えられた方向で書かれ<sup>18</sup>

なければならなかったであろう。

さて、ペイコンはプラトンと対決するなかで、自分が生きる時代はいかなる時代であるのか、またその時代をどのような方向へと導いていくのか、を追究していた。右の富と徳の問題は自分が生きる時代の問題——「現代人」の立場において向き合うべき問題——として彼が引き受けなければならなかった問題である。

『ニュー・アトランティス』には、「古代人」対「現代人」という図式のほかにも、もう一つの図式が議論の大枠として設定されている。この作品が執筆されたのは、ヨーロッパ大陸では「三〇年戦争」が戦われていた時期においてである。当代ヨーロッパの「国際」政治の状況を視界におさめながら、そのなかで「最善」のコモンウェルスの姿を探ろうとする志向を、この作品は秘めている。スペイン語を解する「わたしたち」ヨーロッパ人とペンサレム人との対比のうちに、①イギリスにとって当面の最大の敵国スペイン（カトリック同盟の盟主）とイギリス、という「国民国家」間の対抗の構図と、②（イギリスについて）現にあるイギリスとあるべき（ペイコンが描く「理想」が実現されたならば、と想定した場合の）アルビオン、という *Sein-Sollen* の構図とが重ね合せて設定されている。こうした議論の枠組みのなかで、西ヨーロッパ社会の再編成の状況を踏まえ、そのなかで「国民国家」をいかなる方向へ導いていくか、その処方箋を提示しようとするモチーフがこの作品の、経系に対する緯糸をなしている。<sup>20</sup>

この地点で、ペンサレムの国王ソラモナはいかなる存在であるのか、その根本規定を明らかにしておく必要がある。物語では、①「地上の人間ではあるけれども、神の代理人」(a divine instrument, though a mortal man)<sup>21</sup>であること、②「わたしたちの国の法制定者(＝立法者)」(the lawgiver of our nation)であることが明示されている。(p. 144)ここに描かれるソラモナは、「王権神授説」を理論的武器として神の権威を盾に登場した絶対主義君主、神の世界創造の目的を神に代わってこの地上において実現すべく国家を統治する歴史的人格としての絶対主義君主、自然とその法則をみ

ずからの主体的決断にもとづいて製作し、恩寵をたれるためであれば、みずからが制定した法則を破って奇跡を遂行することのできる神の映像にこの地上において対応し、神の自由な創造行為のごとく、みずからの主体的決断にもとづいて新たな実定的秩序を賦与する作為者、自由な責任主体としての絶対主義君主であることを根本規定とする。ペンサレムにおけるソロモンの対応物とされるソラモナには、このような絶対主義君主の映像と役割が重ね合わされている。<sup>22</sup>

それでは、こうしたソラモナ像を前提として、ベイコンは国王を至上とする、「よく規定され規制された社会」としてある国家体制を描こうとするのであろうか。たといそうした国家体制が「最善」のモンウェルスの姿として暗に想定されていたとしても、当初の想定を掲き砕く傾向が、ベイコンの思想のダイナミズムのなかに孕まれていたのではないだろうか。

そこで次に、信仰と自然探究、信仰と国家統治という問題局面に視点を移し、次章ではサロモンの家の構想に現れたベイコンの思想とその立脚点を解明し、第三章では、家族制度・婚姻制度の議論に即してベイコンの倫理思想の一端を解明し、右の問題に光をあててみよう。

## 2 恩寵と自然——研究機関と自然探究の精神との間——

「サロモンの家」、別名「六日の労作のカレッジ」(the College of the Six Days' Works)。このような名称で呼ばれるペンサレムの自然探究のための共同研究機関は、紀元前三〇〇年に時の国王ソラモナにより創設された機関である。それは「この王国の知性の光の中心そのもの」(the very eye of this kingdom)、『この島の「燈火」(lanthorn)ともいべき位置と意義とを担っている。サロモンの家の名称は、ソロモンがあらゆる種類の植物、動物に関する「自然誌」

を蒐集したという故事に因む。<sup>23</sup> またソラモナは、「神は世界と世界のなかのすべてのものを六日以内に創造されたこと」を学んでいたがゆえに、「すべての事物の真の本性を発見する」ためのこの研究機関に件の別名を付与した。

これが物語において示されるサロモンの家の輪郭であり外部的特色付けである。これを踏まえながら、以下、ペイコンの所説を解析し、ペイコンにおけるサロモンの家の構想を支える思想的基盤を検討することにしよう。

第一に、サロモンの家の設立目的と、研究員の構成と作業の分担についてみる。<sup>24</sup> この点は、ノウム・オルガヌム (*No-vum organum* 新しき機関。自然探究のための新しき論理学) による探究方向、および『大革新』(*Instauratio Magna*) の企図もしくは見取図全体を共同研究機関という客観的な形態をとって現実化され完成された形姿において提示することを意味する。

まず、設立目的はこう謳われている。「この研究機関の設立目的は事物の原因および隠れた運動を認識すること、そして人間王国の領域を拡張し、一切の可能な事物を成就すること」である。<sup>25</sup> (The End of our Foundation is the Knowledge of Causes, and secret motions of things; and the enlarging of the bounds of Human Empire, to the effecting of all things possible.) (p. 156)

この立言は二つの要素から成っている。前半は認識の対象を設定し、後半は認識の目的を明示する。別の視点から言えば、一方はかの有名な命題「知は力である」のなかの知の契機に対応し、他方は力の契機を言表する。自然法則の認識とその技術的適用による自然の作り替えとである。自然の事物の「形相」の自覚・把握を目指す「思弁的＝理論的」(speculative) 部門たる「形而上学」と、その応用を企図する「作業的＝実践的」(operative) 部門としての「魔術」＝「自然的魔術」<sup>25</sup> との「自然哲学 (Natural Philosophy) の両部門が、設立目的の二つの側面に対応しているのである。

次に、研究員の構成と作業の分担を概観し、『大革新』の「区分」との対応を確認しておく。研究活動は合計三六名の

研究員が九つのグループに分れて作業を分担する形で遂行される。(p. 164-5)

1 ①「光の商人」(Merchants of Lights) と呼ばれる一二人。彼らは外国に出かけて調査・探索を行い他国の書物・摘要や実験の範型を持ち帰る。②「略取者」(Depredators) 三人、書物に誌されている実験を蒐集する。そして③三人の「技術者」(Mystery-men) が自由学科および職工技術の実験、その他の習慣的技能を蒐集する。以上は第一部「諸学の区分」に対応する。2次に、適当と思われる新しい実験を試みる「開拓者」(Pioneers) あるいは「坑夫」(Miners) が三人、第三部「自然誌および実験誌」に対応する作業を分担する。3以上四種類の実験を「表」の形に整理する者が三人。「編集者」(Compilers) と呼ばれる。第四部「知性の梯子」に当たる。4この表を踏まえて、「賦与者」(Dowry-men) あるいは「善行者」(Benefactors) と呼ばれる三人が諸物体の作用に関する認識を引き出し、それらを人間生活に応用する方法を導出する。第五部「先駆者」に対応。5以上の作業を踏まえて、これまでの段階で得られた成果を検討するために全員の会合が開かれ、そのうえで、①三人の「燈火」(Lamps) が一層深く自然を究明することのできる新しい、より高次の実験のアイデアを引き出し、これをうけて②「接木者」(Inoculators) 三人が上のアイデアを実験に付し、その結果を報告する。そして最後に③「自然の解明者」(Interpreters of Nature) 三人が如上の手続きを介して発見されたことがらから諸原理・アフォーリズムを導き出す。第六部に対応。

以上の作業区分は自然探究の手続きの理論的な順序、もしくは帰納的上昇の論理的過程を表現している。「学問の分類」の起点となる精神能力に即していえば、「記憶」による史誌・記録に始まり、そこから「理性」による理論的説明に至る認識の道程を示している。その特質は、個別的、質料的な事象から出発して、漸次、その質料性を排除しつつ、個別性を救い上げ、一般性をその形相性において確保する方向への道程である、<sup>26</sup> ということに帰着する。

第二に、サロモンの家の施設・装置の基本性格についてみる。これは、一つには「自然誌・実験誌」に、もう一つは先

の設立目的の後半にある「人間王国の領域を拡張し、一切の可能な事物を成就する」ことに関連し、そして全体として、技術概念にかんするアリストテレスの命題に關係する。

施設・装置は次のようなものである。「下界」と呼ばれる深い穴、「上界」と呼ばれる高い塔、「中層界」と名付けられる中間的な高さの塔。気象や天体の観測装置、貯蔵・冷凍・乾燥の施設、池・噴水・泉・川・滝、園芸・農業用の植物研究室、動物の飼育・品種改良・新種開発の施設、長寿のための調剤薬局、薬用飲食品の研究施設、醸造、パン焼き・食品開発の工場、日用品の製造・発明のための職工技術工場、熱・光・色、視覚・屈折・反射、音響・音声・楽器、香氣・味覚に関する研究所、力学・機械学の施設、幾何学・天文学のための計測器具、その他。また、火器・火薬の研究、顕微鏡・望遠鏡、潜水艦・飛行機の開発・製造、永久運動に関する研究も行われる。(p. 156-64)

こうした施設・装置の単、純、な、枚、挙、のなかで、それらの性格が浮かび上がってくる。この件の文章で、① nature (ないし natural) と art (ないし artificial) ② imitate と produce という相関的な用語が頻用されている。それらの施設・装置の基本性格は、自然物を技術的に模倣して人工物を作る、単にそればかりではなく、自然が自然の通常過程においては産出しなかった物を新たに技術的に創製するために、方法的に考案され組織的に設置されている、ということにある。

先ず、自然物の技術的模倣は自然誌・実験誌の蒐集に連関する。両者の連関付けのうちに、ベイコンの方法、自然的自覚が現れている。虹の自然誌・実験誌を蒐集する場合、自然の虹(自然的自然)の観察にとどまらず、人工の虹(技術的自然)を作ってこれを観察せよ、とベイコンは提唱する。これは、一方で、感覺的所与を矯正し自然的所与の直接性を排し「感覺の欺瞞」<sup>27</sup>を防止する技術的器具による実験の意味を、他方で、自然をこびき苛立たせてその本性をよりよく顕現させる、技術による実験(Ⅱ「自然への拷問」)の意味を認識したうえでの提唱であり、このようなものとして方法的意識のうえ

に立つものなのである。

次に、新しい物の技術的創製は「一切の可能な事物を成就する」ことにほかならない。自然の技術が、終わるところから人間の技術は始まり、後者は前者を継続する。<sup>28</sup> 自然の技術によって産出されずに可能性にとどまっている物を、人間の技術は現実態に転化する。もとより人間は自然的質料そのものを産出することはできない。しかしその作り替えは可能であり、これを現実的に可能にするのは人間の技術である。自然に対する「人間王国」とは、このような自然の技術的な作り替えを通じた、生産的技術による物質的富の構築において実現される人類の福祉を意味する。その王国の樹立は人間が墮罪とともに喪失した「楽園」を、この地上において物に対する支配として回復することに通じているのである。

さらに、以上のような自然物の技術的模倣と新しい物の技術的創製とを言表しているのが、「一般に、技術は、一方では、自然がなしとげえないところの物事を完成させ、他方では、自然のなすところを模倣する」というアリストテレスの命題である。<sup>29</sup> アリストテレスにおいて、この命題は、自然的宇宙に「目的」(telos) が内在しており、技術はこの目的に奉仕する、という事態を指示している。技術は自然の補完物であること以上の意味をもたない。また、神の直接的な世界統治という神学的な観点からすれば、技術は神的意志の補完物である。しかるに、この命題はペイコンにおいて、そうした目的論の枠組みから切り離された局面で立言される。自然物の技術的模倣と新しい物の技術的創製との営みは神学的目的論の文脈を離れて理解されているのである。ペイコンの発想基盤は、たとい自然とその法則が神の創造の所産であることとはこれを承認するとしても、その所産である自然のうちに神的意志である目的を内在的なものとしては認めないこと、自然とその法則および技術はひとたび創造されるや、神の意志から独立していることにある。自然のうちには「目的」は存しない。技術は自然内在的な神の目的に奉仕する補完物ではない。技術によって完成されるのは自然に人間的規定を付加すること、「第一の自然」とは異なる「第二の自然」を産出することなのである。



しかしながら、以上のように、ペイコンにおける技術概念が神学的目的論から切り離された局面において確保されていたとしても、このことは、ペイコンにおいて技術がそれ自身において十全の意味を担っている、ということではない。むしろ技術は、物への支配を回復し、神の世界創造の目的そのものを神の業に代わってこの世において実現する媒体である、という位置付けをうるときにはじめて、正当なものとして裁可される。ペイコンはこのような基本想定にたつ。技術はそれ自身のうちに自己を正当化する根拠をもたない。単に技術と技術による自然の作り替えのみならず、自然探究の知的営みについても、事情は同じである。自然探究は「自然」の地平においてのことであり、それが正当なものとして裁可されるには、「超自然」的な援助を予想する。

そこで第三に、「自然の光」(*light of nature, lumen naturale*) による自然探究は超自然的な「恩寵の光」(*light of grace, lumen gratiae*) に照らされてはじめて是認される、という想定がペイコンの発想をその基底において支えている。別言すれば、ペイコンにおいても、「恩寵は自然を破壊せず、却ってこれを完成する」(*Gratia naturam non tollit, sed perficit.*) という命題が妥当する。<sup>30</sup> 以下この事情を検討する。

聖トマス (Thomas Aquinas, 1224/5-74) のこの命題は、「理性」と「信仰」との関係、自然神学と啓示神学との連続化された関わりの根拠を言表する。「自然の光」としての「自然的理性」は「恩寵の光」をあびた「信仰」の門口にまで人間を導く。すなわち、自然的理性にもとづく神についての知としての自然神学は啓示にもとづく神学を受け容れるための前提である。しかし自然神学はそれだけでは完結せず、啓示神学によって裁可され存在理由を認められてはじめて完成される。これがその命題のおおその趣旨である。<sup>31</sup> これに対してペイコンの場合、自然探究と信仰とが両立すること保証するのが恩寵である。問題は、自然と恩寵とはどう関わるのか、である。自然の光にもとづく自然探究はその端緒と終極において恩寵の光をあびる。この点を照明するのが先に言及したサロモンの家の「賢者」の祈りと、この研究機

関の儀式・典礼の一部である讃美歌・礼拝のことばと祈禱の形式である。

賢者は次のように祈った。「天と地の主人たる神よ、あなたの創造の作品とその秘密とを認識し、……神聖な奇跡の業と自然の作品と技術の作品とあらゆる種類の欺瞞・錯覚とを識別するように、あなたはわたしたち人間 (those of our order)<sup>32</sup> に恩寵をたれられた。……わたしたちの書物によれば、あなたは神聖な優れた目的のためにのみ奇跡をお示しになる (というのは自然の法則はあなた自身の法則であり、大きな理由なくしてはその法則に背かれることはないのであるから) ……」 (p. 137-8) また讃美歌・礼拝のことばと祈禱の形式はこうである。「神を賛えその驚嘆すべき労作の所産を神に感謝する讃美歌・礼拝のことばがあり、わたしたちは日々これを唱える。また、わたしたちの労働を光 (『恩寵の光——引用者』で照らし (the illumination of our labours)、これをよき神聖な用途へと変えるよう、神の援助と祝福とを懇願する祈禱の形式がある。」 (p. 166)

自然的理性による自然探究を行いうるということが、すでにして恩寵の光に照らされていることの証左であり、神の創造の所産を自然の光によって解明することは啓示にもとづく信仰に背くことではない。自然的理性は先ず、恩寵に是認され、それが向き合うべき対象を指定されて探究に向かう。自然は恩寵によつて「破壊」されない。墮罪と神の復讐とから人間を救済するための恩寵なのである。そのかぎりにおいて、自然の光による自然探究は陣痛にも似た苦痛に満ちた「労働」の長き道程に耐えることを、どこまでも課せられる。そしてその道程において、自然的理性を正當に使用することが、これまたどこまでも要請される<sup>33</sup>。これが発端である。しかしベイコンにおいて、自然探究は人間の信仰の門口にまで導くものでも、そこでその任務を終了するものでもない。信仰の営みと自然探究の営みとは次元を異にしながら同時に進行する。前者の終極は善悪を識別する「良心」の確立と人間の自然本性の変革とを通じた人間の「無垢」の回復であり、後者のそれは神の被造物としての自然の認識とその「作り替え」とを通じた「物への支配」の回復である。両者が同時に相俟ったとき

にはじめて、自然探究の「労働」は恩寵の光で照らされる。この局面において自然は恩寵によって「完成」される。ペイコンにおいて自然と恩寵との関係はこのような構図を示す。トマスの命題が妥当するのはこのような構図においてである。ところで、サロモンの家は国王ソラモナが設立した国家機関であることを特質としている。ソラモナに先にみたような映像と役割が重ね合わされているとすれば、神の創造目的を神の業に代わってこの世において実現する媒体たることを対自然的な役割とする研究機関が、地上における「神(または神の代理人)」たることを根本性格とする人格の決断に設立の根拠を有すること、そしてまた、先にみたアリストテレスおよびトマスの命題がペイコンの思想の文脈に応じて妥当する局面がこの国家機関の研究活動に収斂していくことは、なんら不思議ではない。

以上のように自然の創造者で法則の制定者たる神と、地上における法制定者＝立法者たる国王との間に類比が成り立つとすれば、自然を「解明」する (interpret) 自然探究者と、制定法を「解釈」する (interpret) 法律家との間に対応が存する、といえる。この作品の著者ペイコンその人はまさに、「自然の解明」に生涯を捧げるとともに、職業的法律家として女王および国王に仕えた人である。この作品におけるペイコンその人の発想の立脚点は神および国王の製作品を“inter-pref”する者たることにある。オーブリイによれば、ペイコン自身の主治医をつとめた血液循環の発見者ハーヴェイ (William Harvey, 1578-1657) がペイコンの自然学への態度を評して語ったという言葉、「ペイコンは大法官流に自然哲学を書いている」との批評は<sup>34</sup>、この生理学者の真意をこえて、ペイコンの立脚点に関するかぎり正鵠を射ている。

右のような次第であるとすれば、先にみたような役割を担う、君主の設立になる国家機関であるというサロモンの家の基本性格と<sup>35</sup>、「解明者」の立場にたつ自然探究の態度・作業との間には、何等かの位相の落差が生じることになるのではないであろうか。先ず、自然探究の精神態度の意味をイドラ批判の意味に限定していえば、イドラを排除することは、本来、人間精神の活動の所産であるものが実在的世界の客観的規定であるかのごとく固定され、いわば「本性上先なるも

の」にすりかえられて、あたかも永遠の真理であるかのごとく崇拜されるにいたる事態から、人間精神自身を救済することを意味する。人間精神の救済は同時に、自然を自然として承認することである。すなわち、イドラが排除される場面で、自然が自然となり、精神が精神として自然と正確に向き合う地平が切り拓かれる、ということである。イドラ批判はこのようなことを含意する。ここにはじめて、「自然の解明」(interpretation of nature)の地平が成り立つ<sup>36</sup>。それゆえ、「価値あるもの」としての自然との新たな関係をとりむすびうる地点に立つことによって主体的精神となった精神の知的誠実を保証する共同性の場面たることが、研究機関の第一の要件となる。したがって次に、自然探究の事業は、右のような精神を構成原理として組織される共同事業であることを根本規定とする。事業が目指す自然に対する「人間王国」の樹立——人間に対する人間の支配の確立ではない——は、この根本規定が徹底されるときにはじめて、人類の福祉に資する、生産的技術による物質的富の構築につながる。ここに、研究機関の形式的な設立の根拠と探究の事業の実質的な存立の根拠との間に、落差がある。国王は神の権威を盾にし、サロモンの家は地上における「神(または神の代理人)」の決断に設立の根拠を有する、という形で、それぞれその上位のものに形式的正当性の根拠をあおぐとしても、富の構築の実質的な役割を担い、そのことによって、神の世界創造の目的を神に代わってこの世において実現する実質的な基盤をなすのは、「価値あるもの」としての神の作品に直接、共同で向き合う自然探究の事業なのである。

### 3 個人道徳と国家統治——真理と権威と——

右に考察したように、国家機関としての位置をしめる共同研究機関サロモンの家は物質的富の構築にかかわる。しかし富の構築は国家を支える唯一の基盤ではなく、国家基盤の一つ、構造契機であるにすぎない。『ニュー・アトランティス』

においてペイコンが暗に想定している国家体制は、富と国家基盤のもう一つの構造契機である徳とが相俟ってはじめて全体を構成するような世界である。以下、この点を検討する。最初に、作品で描かれるベンサレムの二つの社会制度、家族制度と婚姻制度とについて、前者は富に関わり、後者は徳に関わる次第を確認する。

先ず、家族制度 (p. 147-51) について注目すべき第一の点は、子孫の増殖という観点から家族が捉えられていることである。前にふれた「一族の宴」を催す資格のある「ターサン」(Tirsan) と呼ばれる家長 (Father) は、三〇人の子孫、しかも全員が自分の血をひき健在で、かつ最年少のものでも三才以上であるような子孫をもつ者に限られる。重要な点は、こうした直系的な大集団とそこでの家長の位置が「自然の秩序」(the order of nature) として規定されていることである。家長を頂点とした大集団が、ことがらの本性に最も適った人倫的秩序として賞揚されているのである。①国王はその「臣民の増殖」(propagation of his subjects) についての国民に「債務」を負うとの理由で、国王より右のような家長に年金その他の特権が下賜される慣行 (人口の増殖という要請)、②一族外の者もこの宴の祝福に与れば「富み栄える」とされること (世俗的繁栄の象徴としての宴) に示されるように、家族は物質的富を生産する人的資源の確保の要請に関連付けて捉えられる。直系的な大集団からなる大家族はそのような観点から賞揚される。

しかし反面、看過されてならない点は、ここでの家族は私的なものであることを基本性格とする、ということである。なるほど、ここでの家族は制度として、大家族制、家長制、長子相続制の形態をとっているのかどうかはペイコンの叙述からは判然としない。しかし生活形態からすれば、家長との同居を許される「葡萄の息子」に指名される男子の場合を除いては、成員は夫婦関係と親子関係を基調とする生活を日常的な場面で営んでいる姿が想定されている。こうした私的な親密な生活圏としての家族像が根本にある。<sup>38</sup>

次に、家族の始元としての婚姻・結婚についてみる。婚姻制度 (p. 151-4) をめぐる論点は次の三点である。

第一に、家族形態を支える基本は一夫一妻の形をとる夫婦関係 (faithful nuptial union of man and wife) であり、その基盤になるのは両者の愛である。愛の特質は、相互的であること、愛は愛によってのみ報われることにある。<sup>39</sup> 第二に、世俗的な場面での不道德、「貞潔」に背く独身者・既婚者の不道德的な行為は否認されなければならない、ということである。これに対してベイコンが提示する方向は世俗的な場面への隠遁ではなく、世俗の真只中での禁欲的で徳にもとづく生活態度である。<sup>40</sup> 第三に、これと関連して重要な点は、徳の根本としての自分の「自己」の尊重の意味が強調される。これを立言するのが、「不貞な者は誰も自分を尊重することはできない」と、「自分の自己を尊重すること (the reverence of a man's self) は、宗教について、すべての悪徳をおさえる最も重要な手綱である」という、二つの格率である。(p.153) 自己が不道德的であることは、自己を自然必然性にゆだね自然的傾向の前に拝跪していることに存する。ここでは自己は自分以外の異質なもののものにある。自己を尊重するとは、そうした異質なものから自分自身のもとへ帰ることである。自分自身に誠実であるとき、自分の自己は自分以外の他の「自己」＝他者を見出し、これと正確に向き合う地平に立つ。徳はこの自己と他者との同時「尊重」の基盤のうえに成立する。

以上考察してきたところから、ベイコンが『ニュー・アトランティス』において暗に想定していたコモンウェルスの体制がその輪郭においておおよその形姿をあらわにする。それは、世界創造者としての神に正当性根拠をあおぐ地上における「神(または神の代理人)」たる国王の主体的決断と責任にもとづく統治行為によって整然と確立された統治機構としての「国家」(Commonwealth) である。国家基盤の一面は方法的・組織的な自然探究と自然の技術的な「作り替え」を通じた物質的富の構築により、もう一面は、自分の「自己」に誠実であることによって他の「自己」と正確に向き合う地平において成立する徳の世界によって担われる。富の基盤の上に、徳はみずからを現実化する条件を見出し、また富は徳にうらうちされて真の豊かさとなる。このように富と徳との二つの構造契機は両者が相俟ち、全体へと収斂されて「公

共の福祉」(Commonwealth)を実現し、そのことによって国王の統治目的を達成する。このような方向で「よく規定され規制された社会」としてある、国王を至上とする国家体制であることが、「最善」の状態とされる国家のあり方である。ところで、如上の国家のあり方が想定されているにもかかわらず、「最善」の国家像はより規定された、一層具体的なあり方において提出されることはなかった。それは何故にであるか。一言でいえば、ペイコンの思索は国家を「宗教」的価値から解放して「無神論的な国家」(der atheistische Staat)<sup>41</sup>として確保し、それ自身において「最善」の価値はこれを個人に委ねる方向に向かっていたのであり、そのため彼は、ことがらの本性からしてそれ自体において「最善」の価値を体現した国家ではなく、「最善」の「公共の福祉」を確保するのに「最適」の国家を描かざるをえない局面に追い込まれたからではないであろうか。この点を次の二つの側面から検討してみよう。

第一に、国家基盤の構造契機である道徳(徳)の問題は、宗教(信仰)の問題につながる。

国家と道徳(徳)との間には、前章の末尾で述べた研究機関の形式的な設立の根拠と探究の事業の実質的な存立根拠との間に看取されたような位相の落差が存する。ペイコンによれば、「確かに、人間の自然本性にもとづく徳が大いに普及するには、よく規定されよく規制された社会に俟たなければならない。というのは、国家と良き統治は生れ出た徳を養育するからである。しかし、徳の種子を改善することはあまりない。」<sup>42</sup>個人の徳は国家社会を通じて現実的に発現する。徳にとって国家はその発展形式(Entwicklungsform)なのである。ところで、ペイコンが考える道徳は「内面的道徳」であって、「外面的道徳」ではない。なるほど、無神論においても道徳は成り立ち、徳にかなった行為はありうる。しかしそうした自然的道徳ではなく、徳にもとづく行為を可能にする内面的道徳が問題なのである。<sup>43</sup>『ニュー・アトランティス』で想定されている道徳はこの種の道徳である。そうであるとすれば、内面的道徳と徳とを成立させる実質的根拠は宗教にもとめられなければならない。先に掲げた「自分の自己を尊重することは、宗教について……」の格率は、神によっ

て承認された自己に於てはじめて尊重するに値するという前提のもとで、有意味なものとして理解される。こうして、徳の発現の条件、徳の発展形式としての国家と、国家基盤の構造契機としての徳（道德）との落差は、制度としての教会と内面的信仰との問題に帰着する。

個人の内面的道德（徳）の実質的な成立の根拠が宗教に求められなければならないとすれば、個人の内面的信仰は承認されなければならない。個人一人びとりが超越者と直接、内面において向き合い、同時に神が人間を赦す、という神と個人との相互的認知の場（conscientia）が保証されなければならない。神に是認されてはじめて、「良心」（conscience）は善悪を識別する能力たりうる。これなくして道德は成り立たないし、「無垢」を回復することはできない。個人の内面的信仰を原理的に否認すれば、国家基盤を構成する一つの契機は成立しなくなる。ペイコンは内面的信仰を承認する。先ずペイコンにとって、宗教が議論の対象となるのは統治目的のための手段としてであって、個人の内面的信仰と救済の問題としてではない。宗教は司法・審議・財政と並んで「統治の四つの支柱」のなかに数えられる。<sup>45</sup> この次元での問題なのである。ここで問題となるのは「教会の統治」（教会の財産、特権、聖務と司法権、律法）であり、これは一面では、「世俗の国家と矛盾せずに一致するか」という観点から考察されるべきことなのである。<sup>46</sup> これに対して、信仰は宗教の「内なる魂」（the internal soul）というべきものであり、どこまでも不可侵のものであり、このようなものとして尊重されなければならない。次に、聖書にもらわれている宗教的真理はどこまでも「超自然」的なものであることが承認されている。<sup>47</sup> 「聖書は靈感によって与えられたものであって、人間理性によって与えられたものではない。」この二つの理由から、内面的信仰とこれがかかわる超自然的真理は自然的理性の探究領域の枠外に置かれている。ペイコンがこの点についてこれ以上黙して語らないのは、信仰こそ内面的道德の実質的な存立根拠であることが前提されているからなのである。同時にその沈黙は、内面的良心、内面的信仰、超自然的真理は決して国家の立法原理とはならない、ということを物語っている。



のである。それゆえ、『ニュー・アトランティス』で描かれる宗教のあり方は、①教会が教会であることの本質は、「福音」を伝えることに存し、②制度としての教会は波間に漂う箱船のようなものであることを暗示することによって、政治的統治機構から教会を切り離し国家から宗教的価値を剥奪する方向を示唆するものである、と解されるのである。<sup>48</sup>

第二に、その立法原理とは何か。既述の法制定者と法解釈者との立場の差異は、国家統治の行為と国家理念の提出との差異を引きおこす。ベィコンはこう書いている。「これまで法律について著述してきた人はみな、哲学者か法律家かのいずれかとして著述してきたのであって、政治家(国家を管掌する者)として著述した者は一人もない。哲学者は空想的な国家のための空想的な法律を作り、彼らの議論はあまりにも高すぎてほとんど光を發しない星に似ている。法律家はどうかといえば、彼らは自分が現に住む国に應じて、何が法として受け入れられているかについて書くのであって、何が法であるべきかについて書くのではない。というのは、立法者の知恵と法律家の知恵とは別のものだからである。」<sup>49</sup>法解釈者の立場に立つとき、「主権のどの部分をも阻害せず、これに抵抗しないように心を用いる」ことがどこまでも不可欠な態度なのである。<sup>50</sup>しかし法解釈者の立場を離れて、法制定者の立場、国王の主権の視座に立てば、事情は一変する。国王の主権はそれに先行する法や契約を根拠として成立したものではないこと、国王はみずからが設定した先例を放棄することさえ違法ではないこと、時間の経過とともに、情勢の変化に應じて、常に既成の法を積極的に乗り超えて進むべきであること、が説かれる。<sup>51</sup>ベィコンの主張は、法を法たらしめる立法原理にかかわるものであって、法とは主権者の命令であるという後にホッブスが立法原理として提出した命題に帰着するのである。「人間の法律には、『法律上のとりきめ』である多くの原則・準則がある。それらが確定的 (positive) であるのは權威 (authority) にもとづいてであって、理性 (reason) にもとづいてではない。」<sup>52</sup>ベィコンの沈黙が語るところは、「法ヲルルノハ真理デハナクシテ權威デアル」というホッブスの命題<sup>53</sup>に帰着するのである。

しかしベイコンの関心の力点は、「權威」の論理的根拠を問うことではなく、「權威」が行使される目的・範囲・様態を限定することにあった。

なるほど、彼が「權威」の論理的根拠を問わなかったことの背景には、次のような事情があったであろう。決断にもとづく統治主体の行為は統治者以外の者にとって「測り知れない」ものがある。あたかも有限な人間にとって、神の世界統治は秘められたものであって、多分に不規則で混乱しているようにみえるのと一般である。自然的理性が開示するのは神の「業」だけであって、神の属性の認識は「信仰」に委ねられなければならないように、法解釈者の立場ないし「哲学者」の視座にとって、統治行為は「秘されて表に現れない」(secret and retired) のである。それゆえ、一方では、決断主体の統治行為は統治者以外の者にとって「認識が困難」であるがゆえに、国王Ⅱ「神(または神の代理人)」に対しては、法解釈者としての立場からは信頼あるのみであり、他方では、同時にまた、統治者以外のものが統治行為の秘密を「口外するのは不適切」であるという意味で、その秘密に立ち入らないことは法律家・哲学者としての自分の自己に誠実である所以である。<sup>54</sup>

しかるにベイコンは『ニュー・アトランティス』で、「認識が困難」な統治行為の場に立ち入り、その「秘密」を「口外」している。ソラモナ王が講じた外国人の入国禁止とベンサレム人の海外渡航制限の立法措置に関する記述(『ニュー・アトランティス』第1巻第1章第1節)がそれである。その大筋は、①ソラモナは「この王国と人民を幸福にすることを願って、②何ごとも自給自足でやっていけるこの島の現状を「考慮に入れ」、③往時の島の状態を「記憶に呼び起こし」つつ、④「人間の予見能力が及ぶうるかぎり」(as far as human foresight may reach) で、みずからの行為の結果を予測し、⑤そのなかで、みずからの決断にもとづき法の制定した、ということである。「權威」の行使としての統治行為は、もっぱら、「公共の福祉」(commonwealth) の確保を目的とし、現在における与件をふまえつつ、過去の事例の引証(構想力による回復。imagi-

native recovery) と未来の事態の予測 (構想力による予料: imaginative forecast) との緊張関係のなかで、当の目的にとって何が最も適合的であるかの判断にもとづいて、「hic et nunc」(hic et nunc) において下される決断たることを根本規定とする。<sup>55</sup> ここでペイコンは、「権威」の行使の目的・範囲・態様を限定する方向で、統治行為の「秘密」に即しながら、地上における「神(または神の代理人)」によって担われるかぎりでの新たな歴史を作る、行為の立場を闡明しつつあったといえよう。

ペイコンは、プラトンが『ティマイオス』と『クリティアス』において試みたように、宇宙の構造と人間の自然本性との論理的対応性を基盤として、人間と国家と宇宙の「アナログア」的存在の確認のうえに、ことがらの本性からして「最善」の国家の理想を追究する方向で、問題を立て論議の枠組みを設定したのではない。ペイコンが想い描く「最善」のモンウェルスとは、(神との紐帯のもとにある) 地上における人間にとって「最善」の福祉とそれを確保するための「最適」の統治機構を意味したのではないか。もし刊行された『ニュー・アトランティス』がそれだけで完成された作品であったとすれば、それが死後刊行されたことは、一方では、ペイコンはみずからが想い描く国家像と、ことがらの本性上それ自体において最善の価値を体现した国家との位相の相違を(過去回想的に) 自覚していたこと、他方では、——彼自身が望むといなどにかかわりなく——『ニュー・アトランティス』にもられた思索のうちには、絶体主義体制の後に来たるべき事態を観念のレヴェルにおいて準備する傾動が孕まれていたこと、それゆえ、その思想はこれを生前に公表すれば、社会的に質料化されることなく「流産」するとの予感が(未来予料的には) あったことを物語っているといえよう。

# 註

- 1 本稿ではペイコン個人における思想の生成面は捨象されている。なお、本稿は、「近代」とは何か、をめぐって、近代西欧の哲学・思想をそれ自身に即して把握しぬくという、筆者が自分自身に課した作業(拙稿『近代』の理念・本論集第五輯五六頁参看)の一

環としての意味をも担う。

2 例えば、B. Farrington, Francis Bacon, Philosopher of Industrial Science, London, 1951. 44より Francis Bacon, Pioneer of Planned Science, London, 1963. 247 ベイコンの哲学を「産業科学」の構想の先駆として位置づけたものがある。

3 例えば、ホワットヘッドのベイコン批判はニュートン以後の数学的力学的自然哲学を想定して行なわれている。(Science and the Modern World, Cambridge Univ. Press, 1933, p. 52-7) もっともホワットヘッドの力点は、ニュートンの自然哲学の理論構成の根本機制を浮彫することにあるが。

4 「ベイコンは〔自然〕哲学においては開拓者であったが、その反面、政治に関しては反動といわないまでも、保守であった。」(G. P. Gooch, Political Thought in England, Bacon to Halifax, Oxford Univ. Press, 1946, p. 13)

5 「本書において私は、フランシス・ベイコンはすべての『現代人〔リ近代人〕』——神および自然の観想から、自然を支配し運命を切り拓くための科学的企画へと人間の知性を転換することを推奨した、マキャヴェリからホッブスにいたる思想家たち——のなかで最も偉大な者であった、という一八世紀の見解、今日では忘れられている見解を復権させたいと思う。」一論者は最近のベイコン研究『学問の進歩』の詳細なコンメンタール)のなかで、こう書いている。(J. Weinberger, SCIENCE, FAITH, AND POLITICS Francis Bacon and the Utopian Roots of the Modern Age, A Commentary on Bacon's *Advancement of Learning*, Cornell Univ. Press, 1985, p. 9) この論者は、「おそらく哲学者のなかで最も偉大な者は、イギリスの大法官であった。」という、ルソーの『学問・芸術論』のなかでの評価(Discours sur les sciences et les arts, Œuvres complètes III, Gallimard, 1964, p. 29)を念頭に置いているのであろう。また周知のように、カントは『純粹理性批判』の冒頭に『大革新』序論の一節を掲げている。しかしながら重要な点は、どのような問題局面において一八世紀の「当事者」意識がベイコンをそのようなものとして捉えたか、ということであろう。ヴォルテール、ディドロ、ダランベールに即してこの点をみてみよう。

ヴォルテールは『哲学書簡』のなかで、ベイコンの「最も特異で最も優れた作品」として『ノウム・オルガスム』を挙げ、ベイコンはまだ自然を認識していなかったにせよ「自然に通ずるすべての道を知っており、その道を指し示した」と述べたあとで、ベイコンを「実験的〔経験的〕哲学の父」(Le père de la philosophie expérimentale)と規定し、「ベイコン大法官以前は実験的哲学を知っている者は一人もいなかった。また、彼以後に行なわれたすべての自然学の試験のうちで、彼の著書のなかで指示されていないものは、ほとんど一切もない」と評している。(Lettres philosophiques, Chronologie et préface par R. Pomeau, Garnier-Flammarion, 1964, p. 77-9. また、丸山熊夫訳『ルイ十四世の世紀』岩波文庫(三)、五四頁参照)

次に、ディドロは『百科全書』の「技術」の項目のなかで、「イギリス第一級天才ペイコン」を「フランスで屈指の偉大な大臣コルベール」と並べ称えたりえて、①ペイコンは「工芸技術の歴史を哲学のもっとも重要な部門とみた」こと、②われわれの「探究に順序と方法をもちこむ時」、「発見」の道は容易に切り拓かれ、しかも、もしわれわれが「かつては期待されもしなかった極意」を獲得することができれば、「未来」は「今日われわれがほとんど勘定にもいれていない富」を約束するであろう、と、この「偉大な哲学者」は「彼の世紀に、そして来たるべきすべての世紀に対して、語った」こと、の二点に、ペイコンの不朽の業績を認めている。（桑原武夫訳編『百科全書』岩波文庫、三〇二―三頁）

さらに、ダランベールが執筆した『百科全書』「序言」（Discours préliminaire）をみてみよう。今ここで「序論」の立ち入った分析はできないので、当面の問題の文脈において必要な範囲でその議論を概括する。

序論は大きく分けて、①人間の「認識の系譜」を究明する部分と、②ルネッサンス以来の思想と技術の歴史を回顧する部分とから成っている。

まず、①の部分は、一、「諸観念の起源と生成」を論究する前半部と、二、知識の「系統樹」を総覧した後半部とから構成されている。観念の「生成史的順序」を考察した前半部（前掲訳、一九一―六四頁）では、「感官」にもとづく「直接的」観念と「わたしたちの存在」の「反省的」観念とを起点として、諸々の観念、知識の諸分野、学問の諸領域の「生成」が究明される。ここでは、ロッキやコンディヤックの成果を踏まえながら、デカルトに立ち帰り、デカルト哲学における「アルキメデスの点」ともいうべき『ゴギト』を起点として、そこから諸観念・知識・学問分野を発生論的に導出しようとする試みが企てられているといえよう。以上の「哲学」の導出の後で、「自然の模倣」を原理とする「技術」と、「天才」による「発明」たることを根本規定とする「芸術」とが論究される。次に、学問・技術の「百科全書の順序」を説明する後半部（六四―八二頁）は、ペイコンにおける「学問の分類」を継承しながら、知識・技術の「一種の世界全図」を作製しようとする試みである。ペイコンにおいて「知識の地球儀」を作製する作業は、既成の学問・技術のうちでどの部分が欠如しているか、いかなる分野において「革新」を必要としているかを見極めるための予備作業を意味した。これに対して百科全書が企図する「人間知識の系統図」は学問・技術を「一度に見わたしうるような非常に高い視点」に哲学者を位置させることにある。この点で、ペイコンとダランベールとの間に重点の置き所の相違がある。また『百科全書』では、「記憶」、「想像」、「理性」の精神能力に即したペイコンの分類に原理的な改作が施されている。しかしそれにもかかわらず、この分類の発想そのものはこれをペイコンに負うており、「私たちは、私たちの知識の百科全書の順序と生成史的順序とをできるかぎり同時に満足させると思われる分類を選んだ」とダランベールは述べている。（六九頁）

次に、②の歴史的回顧の部分(八二—一三四頁)は、初めに「古代人」について、「学問と芸術の最初の創造者に同じ」として彼らを称えたあと、「古代」と「現代」「近代」との間の時期を「無知の長い時代」、「暗黒の時代」として位置付け、そのうえで、「無知の幾世紀」の後の「光明の最初の世紀」をルネッサンスに設定している。さらに、一六世紀フランスのユマニスムの系譜にふれたあとで、「哲学」に言及している。ここでは、「人間精神がその師匠とみなさねばならぬ主要な天才」として、ベイコン、デカルト、ニュートンおよびロックの名が掲げられている。この四名はいずれも自然学の改革者として賞揚されていることが留目されなければならぬ。(ロックも「心の実験的物理学」の唱道者とされている。)

さて、この四人の「著名な」人物の「筆頭」に置かれるのが「イギリスの不滅の大法官」である。ベイコンに対するダランベールの評価は次のことに帰着する。「彼は自然学全体のさまざまな対象を一つの一般的な見地で観察することから始めた。……彼は、それらの対象の各々についてそれまでに知られていたことを吟味し、まだまだ発見しなければならぬものの莫大な目録をつくった。」「彼はたんなる体系づくりの敵であって、彼が哲学とみなすのは、私たちの知識のうち、私たちをよりよくあるいはより幸福にするのに貢献すべきの部分(「実験的物理学——引用者」)だけである。彼は哲学を有用なものの学問だけに限定し、いたるところで自然の研究を勧める。……彼は諸技術——これを彼は人間知識の最も高い本質的な部分とみなすのである——を研究するように学者たちをいざなう。」(一〇〇—一頁)

なお、「啓蒙主義」以後に登場するヘーゲルは『法の哲学』「序論」(一八二〇年)で、ベイコンが好んで語った言葉を念頭において、「中途半端な哲学は神からそれたほうへ導くが、真の哲学は神に導く、というのには有名な言葉になっている」と述べている。(Philosophie des Rechts, Suhrkamp Werke, Bd. 7, S. 27)

6 引用はスペンディング・エリス・ヒース編の全集(The Works of Francis Bacon, collected and edited by J. Spedding, R. L. Ellis, and D. D. Heath, London, 1859-61)による。『ニュー・アトランティス』(Vol. III)からの引用は頁数のみを本文中に示し、その多の著作については巻・頁を註に掲げる。

7 Vol. V, p. 79.

8 『ニュー・アトランティス』は「新しい世界の完成形態を宣明するとともに、同時にプラトンのユートピアを模倣してお」り、この作品は「古代のユートピア的な政治哲学の観点から近代的な企画を省察する」ものである、として、この作品がベイコンの「道徳・政治哲学」において有する意義に留目したのはワインバーガーである。(op. cit. p. 27-8)卓見である。ただし、「古代」対「近代」という図式はこの作品の一つの側面にすぎない。また、『ニュー・アトランティス』が「未完」の遺著であるとされることにつ

いては、彼はこれを自明視しており、「未完」に終わった事情を解明する秘鑰は『学問の進歩』を解説することによって得られるとの方で問題設定を行なっている。

9 cf. *In Praise of Knowledge, Works, 1824, Vol. 2, p. 126. Novum Organum, Lib. I, Aph. 108-10.* またデントロフ「イギリスの哲学者とともに、三つの発明に注目した」と述べて「三大発明の意味について語っている。(前掲訳、三二〇—一頁)

10 本稿ではプラトンの『ティマイオス』および『クリティアス』とペイコンの『ニュー・アトランティス』との連関という局面にこの問題を限定する。ペイコンの思想全体に互ってこの問題を論ずるには、他の著作、とりわけ『学問の進歩』や『古代人の知恵』(De Sapientia Veterum)の立ち入った分析が必要である。また「近代」とは何か、をめぐって、形成途上の「近代」をその内部から推進した者たちが「古代」との対決のなかで、自分たちの時代をいかなるものとして捉えていたかを、当事者の立場と意識に即して把握するには、一七世紀の後半に起こった Ancients と Moderns との優越論争を検討する作業が必要であろう。

なおペイコンは、「物事をそれが初めて形成された原初点に戻して見よ、そしてどのような点において、またいかにしてそれが衰退してきているかを詳らかに考察せよ。だがしかし、二つの時代から忠言を汲みとるように。すなわち古代からは、何が最善(best)であるか、また後代(「現代」)からは、何が最適(fittest)であるか、を。」と言っている。(Of Great Place, Vol. VI, p. 400)「最善」(ことがらの本性からして、それ自体において)と「最適」(人間にとって)との対比のうちに、彼は「古代」との対比における「近代」の一つの特質を看取していたといえよう。

11 『ティマイオス』は、哲学者王による理想的国家の実現の道に疑問を懐くにいたったプラトンがそれに代わって、理想的国家の宇宙論的、自然学的必然性を問う方向で著したものである。理想的なものの実現は宇宙の構造と本性そのものにまで拡大された認識と実践の地平においてはじめて可能にされることを論証しようとするモチーフで、この著作は貫かれている。デミウルゴスは永遠なるもの・善きものを見て、「最善」を目的として世界を作った、との根本命題からするこの宇宙創生論は、先ず、①デミウルゴスの作った宇宙、②宇宙のからだ、③宇宙の魂、そして④人間の魂とからだの系列(この下降の過程で、根源的な「理性」は人間の「魂」に分与されて人間の「からだ」に宿る)において、「理性に従って作られたもの」を、次に、「必然」「非理性的、非存在的な偶然性」に従って生成したものを論じ、これを踏まえて、現実の世界と人間は「理性と必然の共働の所産」であることを、幾何学的秩序に従って論証する。この下降的な演繹的論証の手続きを通してプラトンが説くところは、今度は上昇的に、必然から生ずる「不完全」なものを理性にもとづく「完全」へと仕上げていくところに人間の行為の要諦が存し、この行為自体、人間の魂が分有する宇宙の理性的構造と自然の本来的運動にその基礎を有すること、したがって、人間にとって、「初めの本性に従って」生きることが「最

善」の生活であり、このことは「最善」を目的として選んだデミウルゴスの意図に従うものであること<sup>20</sup>に帰着する。

『クリティアス』は、『ティマイオス』の冒頭でソクラテスが要約する理想的な「国制」(politeia)のあり方を歴史以前の黄金時代のアテナイに合体させる方向で、ソロンに先だつた九〇〇〇年も昔におけるアテナイの理想的状态と、アトランティスの形態、状況を叙述したものである。

12 Timaios, III 25d. 『プラトン全集6』角川書店、一八七頁。ただし、Kritias では「地震」のみ。(III 109e, 二八二頁)

13 「新世界」の民族が「洪水」によって消滅したとする推測については、cf. Of Vicissitude of Things, Vol. VI, p. 512-3<sup>21</sup>。だが、このエッセイではコヤとティランネルとの区別も、洪水が「神の復讐」の現れであるとの意味付けもなされていない。

14 Timaios, III 22a. 一八三頁。Kritias, III 120a. 二八六頁。またデウカリオンにベーコンが言及した箇所としては、Vol. VI, p. 737<sup>22</sup>。

15 Timaios, III 25a-c. 一八七頁。Kritias, III 108d. 二八二頁。

16 Kritias, III 120e-121c. 二九七—一八頁。

17 作品解題、四一四—五頁。

18 「人間は随罪によって無垢の状態と被造物に対する支配を失った。しかしこの両者は、この世において、ある程度まで、前者は宗教と信仰によつて、後者は技術と学問によつて回復するものとがである。」(Novum Organum, Lib. 2, Aph. 52) 但し、cf. Valerius Terminus, Vol. III, p. 220.

19 ベーコンの富に関する見解については、cf. Of Riches, Vol. VI, pp. 460-2. この富と徳の問題連関は同時代一八世紀のイギリス、特にスコットランドの哲学者と継承されていく問題連関でもある。(cf. I. Hont & M. Ignatieff (ed.), *Wealth and Virtue*, Cambridge Univ. Press, 1983)

20 この点では、①ベーコンが生きた時代が宗教改革以後の「社会変動」の時代であり、一七世紀の「全般的危機」の時期に重なっていること、(cf. R. H. Trevor-Roper, *Religion, the Reformation and Social Change*, London, 1972. T. Aston (ed.), *Crisis in Europe 1560-1660*, London, 1965)<sup>23</sup>、また②そのなかの諸国家間の勢力関係がこの物語の冒頭に述べらる「極東」の島国の命運に微妙な作用を及ぼしていること、(cf. B. T. Wakabayashi, *Anti-Foreignism and Western Learning in Early Modern Japan*, Harvard Univ. Press, 1986, Chap. 3) にかかわる問題には立ち入らなう。

21 この「instrument」の語は、①「God used him as an instrument to reform his Church.」(Bramhall, 1661) など



用例 ③“*Deus, or vice Dei*” (Of Empire, Vol. VI, p. 423) と *deus* は君主の規定 ④“*Kings are……God's lieutenants upon earth……*” と *deus* は一神の自己規定 (cf. Gooch, op. cit., p. 7) と *deus* ⑤“*God hath appointed the magistrate his vicergerent in this world*” と *deus* 仮に帝王神権説の立場で議論するとして」との条件での J. ロックの言葉 (F. Bourne, *Life of John Locke*, Vol. I, p. 182) を踏まえて “vicergerent” の意味に解する。

22 この場合、ヘイコンはこの「絶対主義君主」のもとに、ジェームズ一世という特定の人格を想定している、と考える必要はない。なお、「絶対主義君主」の根本規定に関連して、自由な責任主体としての君主と「永遠真理」の作者としての神との対応性を示す例示として、しばしば引用される一六三〇年四月一日付メルセンヌ宛のデカルトの書簡参看。(Œuvres de Descartes, publiées par C. Adam et P. Tannery, Tome V, Correspondance I, J. Vrin, 1974, p. 145)

23 Cf. Valerius Terminus, Vol. III, p. 220.

24 ベーコンの時代のアカデミーの動向に関しては、ローワーの「アカデミア・デイ・リンチエイ」(Accademia dei Lincei: Academy of Lynxes. 無知蒙昧と闘う真理の形姿が、頭が三つある冥府の国の門を守る番犬ケルベロスの内臓を引き裂こうとしているオオヤマネコの映像として表象されたところから、この名で呼ばれた。G・ガリレイは一六一一年にその会員となっている。)があったことに留意しておく。

ところで、ヘイコンが描いた夢は王政復古後に現実化されることになる。一六六二年に正式に発足した「王立協会」——「自然認識を増進するためのロンドンの王立協会」(The Royal Society of London for the Improvement of Natural Knowledge) は、その歴史を記したスプラットが「今日その緒についたその企画すべてを頭に描いた唯一の偉大な人物はヘイコン卿である」と語ったとく、いわばサロモンの家を地上の現実のものへと質料化するものであった。協会の設立目的・作業内容は次のように規定されている。「自然の事物の認識を増進し、すべての有用な技術、製造法、職工的技能、機械類、実験による発明を改善すること(——ただし、神学、形而上学、倫理学、政治学、文法学、修辭学、論理学にはかかずらわない)。

現在は失われているような、称讃すべき技術および発明品の復元を企図すること。

古代もしくは現代の著名な著作者によって案出され、記録され、あるいは実行に移された、すべての体系、理論、原理、仮説、原論、史誌、および(自然的、数学的、ならびに職工的な)諸事物の実験を吟味検討すること。これは、自然あるいは技術によって産出されるすべての現象を解明するための、そして諸事物の原因を合理的に記述し記録に残すための、堅固な哲学の完璧な体系を編み出さんがためである。

以上のことはすべて、神の栄光と当協会の設立者である国王の名誉がいやますように、そして王国の利益と人類の全般的福祉を増進せんがためである。」(A. R. Hall, *From Galileo to Newton 1630-1720*, Collins, 1963, p. 132)

発足に至る経緯は概要、次の通りである。一六四〇年代、すでに研究活動を開始していた自然学者のグループが三つあった。ドイツ人プロテスタント S・ハートリプのサークル(「不可視のカレッジ」Invisible College) ロンドンのグレンシャム・カレッジを拠点としたグループ、およびオックスフォードのグループ(これは五〇年に「オックスフォード哲学協会」Oxford Philosophical Society を設立する。ちなみに、五二年にオックスフォードに入学したロックは在学中、このグループのメンバーである R・ボイル、R・ロウア、R・フック、T・シドナムの研究に参加している)がこれである。世紀の中葉に自然学研究に従事していた者たちは大体、いずれかのグループに属し互いに知りあっており、特に第二と第三のグループの場合、双方の会員を兼ねる者も多かった。六〇年、これらの者の間から「実験的学問」を増進するため「カレッジ」創設の提案が出され、チャールズ二世から認可が下りて、活動を開始。翌年、名称を Royal Society とすることが決まった。正式に勅許を得るのは六二年、国王指名のブラウンカー(王党派)を会長、J・ウィルキンズと H・オウルデンバークを書記とし、国王任命の二一名を評議員として、協会は正式に発足した。ロックは六八年、I・ニュートンは七二年に会員に選ばれている。

25 「魔術」と「科学」との連関については、下村寅太郎『科学史の哲学』(弘文堂 一九四二年)第四章第三節、P. Rossi, Francis Bacon: *From Magic to Science*, Univ. of Chicago Press, 1968, J. Bronowski, *Magic, Science and Civilization*, Columbia Univ. Press, 1978 等、参看。

26 cf. Valerius Terminus, Vol. III, p. 245-7. そっでは、対象面において「質料」(materia)——個別——多様(多)と、「形相」(forma)——一般——統一(一)が、精神面ではそれに対応するものとして「感覚の報告」(reports of sense)と「理性の概念」(concept of reason)が想定されている。

27 これはベイコンがデカルトと問題意識を共有する一局面である。(cf. *Meditatio 1 & 3*)

サロモンの家には、「発明・発見」とは一見無関係に見える「感覚の虚偽」を研究する諸施設(houses of deceits of the senses)が設置されている。「神聖な奇跡の業と自然の作品とあらゆる種類の偽瞞・錯覚とを識別する」という、研究機関の本来の主旨に則っていることである。ここでは、この施設設置の根柢には次のような認識があるということを確認しておく。「われわれのところには、実は自然的事物であるのに、人々の称讃を博するような事物が非常に沢山あるのであるから、われわれはそれに偽装を与え、もっと奇蹟的なもののようにみせかけようと骨折るつもりならば、個物の世界においては、感覚をだますことができるので

ある。」(p.164, cf. Vol. IV, p. 253) こうしたハイムソンの自覚は、「奇蹟はこれを証明し、これを宗教体系の基礎に据えることができるか」を論究したD・ヒュームの「奇蹟」論(Of Miracles)の精神に通ずるものがある。ヒュームは、「[証言によって]奇蹟を行なったとされる存在が……全能なるものであるとしても、当の奇蹟がそのためにより蓋然性の高いものになることは少しもない。そのような存在に関して、われわれは自然の通常の行程のなかで得られる、その存在の所産についての経験による以外には、その属性も能動作用もこれを知ることとはできないからである。」と述べて、その直後、ハイムソンのNov. Org., Lib. 2, Aph. 29の一節を引用している。(Enquiries concerning the Human Understanding and concerning the Principles of Morals, ed. by L. A. Selby-Bigge, Third Ed. with text revised and notes by P. H. Niddich, Oxford Univ. Press, 1975, p. 129)

28 Vel. A. Schmidt, Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx, Europäische Verlagsanstalt, 1962, Kap. II. また「三木清『構想力の論理』『三技術』(『全集』第八巻所収)、拙著『三木清の世界』(第三文明社、一九八七年) VI 参看。

29 Physica, II. 8. 『アリストテレス全集3・自然学』岩波書店、七五頁。

また、ホッブスは『リヴァイアサン』の冒頭で次のように書いている。ここには、国家構成をめぐるその作為的技術的性格を強調する意識が尖鋭な形で表出されている。「神がそれによって世界を創造し、それによって世界を統治する技術(the Arts)である自然(Nature)は、人間の技術によって、他の多くのことにおいてと同様に、それが人工的動物(artificial animal)をいづることでできる点においても、模倣される(imitated)。……技術はさらに、あの理性的で最も優れた自然の作品である人間を模倣する。というのは、技術によって、モモンウェルスまたは国家(ラテン語のキウィタス)と呼ばれるあの偉大なリヴァイアサンという、人工的人間(artificial man)が創造される(created)からである。ただしこれは、それが保護し防衛するように設立された自然的人間(natural man)より大きく強力である。」(Leviathan, Reprinted from the Edition of 1651, with an Essay by W. G. Pogson Smith, Oxford Univ. Press, 1967, p. 8. 傍点は引用者)

30 Summa theologiae, I. 1. 8.

31 トマスにおいてこの命題は、「国家」にもあてはまる。すなわち、人間の「自然本性」(人間の「自然的」不平等)を基盤とする、「自然的秩序」の位相にある国家も、「永遠」の秩序に参入するための通路として、神の世界統治の枠内に組み入れられるとき「完成」される。

32 「わたしたち人間という種に属するものども」のこと。この“our order”を直接サロモンの家と等置するのは無理であろう。なるほど、サロモンの家を“order”と言い換えている所が二ヶ所ある。(p. 145-6)しかし、①両方とも“Order or Society”の形

で出てくる、②ともに大文字で始まっている（一八二四年刊の全集では小文字。このことは逆に、スベディング他編の全集は *order* と *Order* とを区別していることを物語るのではないか）、③しかも「祈り」の言葉はこの二ヶ所より前に来ている。（さらに、研究員たちは “the Fellows or Brethren” (*ibid.*) とよばれる）件④ “order” は “A class, group, kind, or sort of persons, beings, or things, having its rank in a scale of being” (OED) の意味にたらず “our order” は、サロモンの家とは等置せず、*great chain of being* (諸存在の階層的序列) のなかの “our (human) species” と解する。そこで、①神は人間の営みを通じて自己および自分の所産を自覚する、というヨーロッパ精神史における想定、②物語の最後の部分で、自然探究の営みが担い、手を新たに、展開されることが予想されている (p. 166) ことに照らして、“those of our order” は上のようにこれを訳す。もとより、この人類の知的営みを代表的に具現するのは、特殊的には、さしあたりサロモンの家とその研究者たちである。

33 デカルトが唱道し、ロックが高らかに掲げ、カントが「啓蒙の標語」として定式化した自主的能動的悟性使用も、ベィコンにおいて、こうした「墮罪」とこれに対する「神の復讐」というイメージにまどわれていたことに留意しておく。なお、「墮罪」の神話に関するヘーゲルの解釈については、Vgl. *Enzyklopädie I, Vorbegriff, §24, Zusatz 3, Bd. 8, S. 87-9.*

34 J. Aubrey, *Brief Lives*, ed. with an Introduction by O. L. Dick, Secker and Warburg, p. 130.

35 この性格に即していえば、サロモンの家はすでに「Royal Society」である。現実の “Royal Society” は、チャールズ二世の勅許を得て正式に発足したところから、この呼称が付けられた。しかし、「チャールズ」の政府がしたのは、このアカデミーの誕生に勅許を与えることだけだった（ウォルテル・前掲訳、五六頁）のであり、協会は純粹に私的な民間団体であった。国庫からの財政援助は一切なく、その基盤を支えていたのは会員が納める入会金と週一シリングの、しかもしばしば滞納されることがあった会費だけであった。国家の機関たることという性格を担った点で、ベィコンの「理想」をより忠実に体現したのは、コルベールの尽力によって設立された *Académie Royale des Sciences*（一六六六年創設）であった。王立科学アカデミーは「国家の科学部門」というべき性格を帯び、自然学研究に対する国家援助の最初の事例であった。（cf. Hall, *op. cit.*, p. 146ff.）

36 以上のことに関連して次の三点を確認しておく。

第一は、「解明」の意味である。“interpret” とは、その語源（*inter*[into] + *pretium*[price]）が示すごとく、「価値あるもの」のなかへ」の謂である。したがって「自然の解明」とは、「価値あるもの」として自然を承認し、その「なかへ」と自然に肉薄することである。

第二に、自然と向き合う精神は、「価値あるもの」の前に遜ることを知る「謙虚な精神」でなければならぬ。「まず最初に幼い子

供のようになるのであれば、何人もそこに入ってはならない、ということは、神の天の国の場合と同様に、人間の知の王国についても当てはまる。」(Valerius Terminus, Vol. III, p. 224) 自然と人間という、横の軸での被造物内の区別と関係において、人間は自然に「従わなければ」ならないという事態は、プロテスタンティズムの登場とともに現れた、縦の軸に即しての《*gola fide*》(M・ルター)の問題局面に繋がり、人間がその内面において神と直接に向き合う垂直の基軸において、人間の意志は神により「絶対的」に規定されている事態と構造的に対応する。垂直の基軸での神との直接の向き合いのなかで、一人びとりの自己が神により是認されることになれば、このことは、人間対人間の水平の地平において、自分の「自己」を自己として尊重することは同時に他の自己を他の自己として尊重することに繋がる、という局面を切り拓く。こうした構造連関において、「自然の解明」の地平と新しい道德の地平とは原理的には同時に成立するのである。

第三に、ハイコンのイデオラ論の根柢に、「世界と精神との対応性という根本前提、ないし確信があったということである。彼は単に、「存在の真理と知の真理とは全く同一である」(In Praise of Knowledge, op. cit., p. 123)として、存在と思维との一致を考えていただけではない。「神は、宇宙の像を遍ねく映す鏡 (a glass, capable of the images of the universal world) として人間の精神を造った」(Valerius Terminus, Vol. III, p. 220)と語るとき、彼は、人間精神は労働の道程の長きに耐えれば、その果てに、全世界をくまなく認識することのできる地点にまで「昇り」つめることができる、という信念を表明しているのである。

38 家族の「私」性の強調は、軍人階層に限ってであるが、家族形態を否定し子供の国家共有を説くプラトンに対する批判の意味も含む。ただ、論理の問題としていえば、家族否定論は、実定的な人倫制度としての家族をめぐる既成の「イデオラ」から「自由」に、家族とは何かを原理的に考察するための、思考実験 (Denkexperiment) の通路として、意味をもつであらう。

39 cf. Of Love, Vol. VI, p. 397-8.

40 cf. Of Marriage and Single Life, Vol. VI, p. 391-2.

41 K. Marx, Zur Judentfrage, Werke, Dietz Verlag, 1981, S. 357.

42 Of Custom and Education, Vol. VI, p. 472. 傍点は引用者。

43 cf. Of Superstition, Vol. VI, p. 415-6.

44 Advancement of Learning, Bk. II, Vol. III, p. 479.

45 Of Seditions and Troubles, Vol. VI, p. 408.

- 46 Advancement of Learning, Bk. II, Vol. III, p. 490. 「他面では」教会内部のことからといって。
- 47 *ibid.*, p. 484.
- 48 官職にあらざるベコンは「一貫して国教会の改革に反対していた。」
- 49 Advancement of Learning, Bk. II, Vol. III, p. 475.
- 50 Of Judicature, Vol. VI, p. 510.
- 51 cf. Gooch, *op. cit.*, p. 16.
- 52 Advancement of Learning, Bk. II, Vol. III, p. 480.
- 53 cf. *op. cit.*, Chap. 26.
- 54 Advancement of Learning, Bk. II, Vol. III, p. 473-4.
- 55 以下に①「公共の福祉」②過去の想起と未来の予料③「いつと今」および④「決断」の四つの構造契機が含まれ、相互に関連している。以後の歴史的展開のなかで、①は「近代社会」の「組織原理」としての「公共性」とは何か、「公共性」を担うのは誰か、の問題に繋がり、「市民的公共性」の概念へと発展する。(Vgl. J. Habermas, *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, Luchterhand Verlag, 1962) ②は「想像力〔構想力〕」(imagination)の問題に帰着する。時間的未來への展望を切り拓く、想像力の作用の積極的意味と能動的役割を解明し、《市民社会》の理論的地平を定位する作業を遂行したのはヒュームである。③については、《市民社会》の論理を超えて、社会的歴史変革の論理において「創造的」行為が焦点となると、当の行為がそこから発する点として解明の課題となる。「具体的なこととは……きわめて深く広く分岐する媒介〔歴史的過去と歴史的未來の媒介——引用者〕の契機であり、決断の契機であり、新しいものの誕生の契機である。」(G. Lukács, *Geschichte und Klassenbewußtsein*, Luchterhand Verlag, 1970, S. 348. cf. K. Mannheim, *Ideology and Utopia*, translated by E. Shils and with a Preface by L. Wirth, Routledge and Kegan Paul, 1979, p. 100, p. 107) ④「いつと今」が極限的な限界状況にあり、なにか「決断」それ自身が規範化されるとき、例外状況における最終的な決断主体に「主権」がすりかえられ、「規範へのあらゆる拘束」が否定されるに至る事態が生じうる。「主権者とは、例外状況にかんして決定をくだす者をいう。」(C. Schmitt, *Politische Theologie*, 1922. 田中浩・原田武雄訳『政治神学』未来社、一一頁)
- 56 Vgl. M. Horkheimer, *Zur Kritik der instrumentellen Vernunft*, Fischer Taschenbuch Verlag, 1985, insbesondere, I 1 Mittel und Zweck.